

<研修の概要・内容>

1. エジンバラ大学（牧場、大動物臨床、小動物臨床）

エジンバラ大学の牧場(The Langhill Farm steading)は非常に広大な施設で、何百頭もの乳牛が飼育されていました。アニマルウェルフェアに基づく飼育ガイドラインに沿って飼育されているとのことで、牛舎も広く快適な環境に見えました。しかし、輸送などまだまだ課題が多く、今後さらにアニマルウェルフェアに関して研究を行い、改善されていくようです。



蹄実習用の装置



直腸検査実習装置

大動物臨床見学では、病院での馬診療、馬の往診、牛・羊の往診の中から選択して見学を行いました。私は牛の往診および羊の往診を選択しました。牛の往診では、子牛の下痢症鑑別（クリプトスポリジウム）と妊娠鑑定を見学しました。妊娠鑑定の際、どの牧場でも保定装置を使用して直腸検査を行っていました。保定装置には誘導路が設けられており、牛が自ら装置に入っていくのが印象的でした。また、直腸検査ではポータブル超音波検査を使用し、週齢の鑑定も行っていました。羊の往診では、何百頭もの羊を飼育している農家が多いため、個体診療は行わず群管理（主に寄生虫コントロール）を行っていたとのことでした。スコットランドは高地が多く、同じ畜主でも土地により飼育する羊の種類を分けているため、様々な種類の羊を見ることができました。



牛の保定装置



羊の群（寄生虫罹患羊）



牧羊犬が羊を誘導する様子

小動物臨床では、一般診療、内科、画像検査、循環器科、エキゾチック科から選択して見学を行いました。私は一般診療および画像検査を選択しました。一般診療でまず驚いたことは、患畜（犬）が病院に勢よく駆け込んでいく様子でした。多くの患畜が病院を怖がらないとのことでした。診察室は10畳位の広いスペースで、患畜は自由に行動でき、飼い主も椅子に座ってゆったりと話ができるため、患畜にとってリラックスできる環境のようでした。また、処置室でもトリートが準備されており、採血などの処置の際にも震える様子が見られませんでした（患畜によるとのことです）。画像検査では、超音波検査を見学しました。専門の先生が検査を行っており、疾患部位以外にも丁寧に1時間近くかけて検査が行われていました。専門医制度を非常に重視している様子が伺えました。

## 2. グラスゴー大学見学

グラスゴー大学は、ジェームス・ワットやアダム・スミスを輩出した大学で、歴史を感じさせられる建築でした。動物病院は建設されたばかりで、洗練されたデザインでアメニティにも力が入っていました。リハビリテーションルームが用意され、今後理学療法が組込まれていくようです。



広々とした入院ケージ



理学療法の器具

## 3. エジンバラ動物園の見学

エジンバラ動物園ではエンリッチメントに力が入れられており、ケージの中に木が植えられていたり、玩具が入れられたりと工夫がこなされていました。これらの効果は独自の評価表を用いて、分析を行っているそうです。また、野生動物保全計画は他のヨーロッパの国々と共同で行い、動物の繁殖を行っているそうです。霊長類の研究に力が入れられており、展示にも力が入れられていました。



エンリッチメントの案内



ペンギンの人工巣

## 4. その他

- スターリング大学（水産系の研究室見学、飼育施設見学）
- Surgeons' Hall Museums の見学
- The RSPB's Vane Farm Nature Reserve（蜂の養殖場、自然保護センター）の見学

### <感想>

研修プログラムは多岐に亘り、また、夕方や休日には街を散策したり、ハイランドゲームを見学したり、郊外でウォータースポーツを楽しんだり、充実した毎日を過ごしました。街では犬を連れている人が多く、ボーダー・テリアやスコティッシュ・テリア、イングリッシュ・コッカースパニエルなど、イギリスの犬種を多く見かけました。犬種に偏りがなく、様々な犬種が飼われているようでした。また、スターリングでは野生のウサギやリスが多く、また白鳥も近くで見ることができました。郊外ではいたる場所で牛や羊、馬が飼われており、動物が非常に身近な国であるという印象を受けました。一つ一つの見学は約半日と短く消化不良の部分もありますが、スコットランドにおける獣医師の診療を見学でき、日本との相違点を多く発見でき大変興味深かったです。また、同行した北海道大学の先生方・学生さん達からも学ぶことが多く、有意義な時間を過ごせました。



ハイランド・キャトル



野生の白鳥

反省点として、日本の臨床現場や水産に関する知識不足のため相違点が分からなかったことや、組織学・解剖学の英単語を忘れており説明の理解や質問を十分にできなかったことがあります。事前準備をしていれば更に学びが多かったと思います。

反省点として、日本の臨床現場や水産に関する知識不足のため相違点が分からなかったことや、組織学・解剖学の英単語を忘れており説明の理解や質問を十分にできなかったことがあります。事前準備をしていれば更に学びが多かったと思います。